



白河地域在宅医療拠点センター通信

「多職種連携研修会」開催報告

日時：平成 30 年 12 月 18 日(火)午後 6 時 30 分から午後 8 時 15 分 場所：白河市立図書館 地域交流会議室 参加者：92 名

現在、療養の場や人生の最終段階を迎える場が、病院から、その方々が住み慣れた生活の場としての自宅や施設など、地域へ移行する転換期となっています。そのため、昨年、当センターにおいて、県南二次医療圏の居宅介護支援専門員の在宅看取り支援等の課題把握を目的にアンケート調査を行いました。①在宅看取り支援ができた要因、できなかった要因、②在宅看取り支援の不安要因、③多職種との連携状況、④ACP の取り組みの現状およびそれらの課題について、参加者同士で共有していくため、アンケートの結果要約を報告いたしました。そして、今回の研修会のテーマとなる「緩和ケア」の講義、グループワークを通して、前述の課題も含め、本人・家族を支えるための（在宅）看取りケアまでの支援について、どのような多職種連携が重要となるか、皆で考えていくこととしました。

今回の研修会は、福島県看護協会県南支部の皆様にご協力をいただきました。

【第 1 部】講義

①「緩和ケアにおける多職種連携」講師：長谷川友美氏(白河厚生総合病院 主任看護師・緩和ケア認定看護師)

人生の最終段階にある患者さん・利用者さんの人生（生活全体）を支えていくためには、なぜ多職種でのアプローチが重要であるか、ICF の概念から説明がなされました。また、ACP、「人生の最終段階における医療・ケアの決定プロセスに関するガイドライン」にも言及され、緩和ケアについて具体的な講義がなされました。

②「在宅看取り～訪問看護介入からみえる多職種連携～」講師：神田やよえ氏（しらかわ訪問看護ステーション 管理者・訪問看護認定看護師）

ターミナル期における訪問看護師の役割として、療養環境の整備、医療処置、精神的ケア、意思決定支援、家族支援、緊急時の支援等の具体的な説明があり、〈終末期のプロセス〉の段階を見極め、その段階に応じた多職種連携での支援の重要性の話がある。そして、本人とともに家族を支援していくことは、「本人の思いに叶った死までの『生』を支えること」であり、グリーフケアまで継続されること、そして〈死の教育〉の重要性についての話をいただいた。

【第 2 部】事例に基づくグループワーク：事例提供者・神田やよえ氏、グループワーク・ファシリテーター：福島県看護協会県南支部員 7 名

「がん末期の方が在宅療養生活を送るにあたり、どのような支援が必要か」、各グループで活発なディスカッションがなされた。（文・円谷）



「医療・介護多職種連携の集い」開催報告

日時：平成 31 年 2 月 16 日(土) 午後 2 時～午後 5 時 15 分 場所：鹿島ガーデンヴィラ 参加者：128 名

主催：白河医師会・福島県県南地域援介護支援専門員協会 共催：東白川郡医師会・白河歯科医師会・白河薬剤師会

この「集い」は、公的介護保険制度がスタートした翌年の平成 13 年度から、医療と介護の連携構築を目指し「医師と介護支援専門員の集い」として県南地域介護支援専門員協会、東白川郡医師会、白河歯科医師会、白河薬剤師会と白河医師会の協力のもと、毎年開催されてきた、たいへん歴史のある多職種連携の場があります。

昨年度より、地域包括ケア推進のための多職種連携をより強化していく目的として、「医療・介護多職種連携の集い」として、新たに開催することとなり、今年度で 18 回目の開催となります。

今年度は、在宅医療に積極的に取り組まれている先生方から、講演および事例提供をいただき、グループワークにおいては、在宅療養されている利用者さん、そのご家族をいかに支えていくか、それぞれの専門職の立場で考え、ディスカッションし、在宅療養を支えるための連携のあり方を考えていきました。

【第一部】講演：「在宅医療と多職種連携～末期がんの患者さんを最期まで看取るために～」

講師：真岡西部クリニック院長 趙 達来 先生

【第二部】「医療・介護事例検討会～グループワーク～」講師：①鈴木ホームクリニック院長 鈴木茂毅 先生

②ニューロクリニック院長 佐藤健 先生 ③白河在宅支援診療所院長 穂積彰一 先生



講演会講師：趙 達来 先生



グループワークの様子

「排せつケア研修会」開催報告

【開催日時・場所・参加者】①平成 31 年 1 月 17 日 午後 6 時 30 分～午後 8 時 30 分・白河市中央保健センター・訪問介護職員 20 名
②平成 31 年 1 月 24 日 午後 6 時 30 分～午後 8 時 30 分・泉崎村保健福祉総合センター・訪問介護職員 21 名

【第一部】「オムツの選び方・使い方のポイント」講師：白十字株式会社

紙オムツを使用して重視されることは、「漏れない排泄ケア」であり、尿漏れは利用者本人と介護者の精神的な負担が最も大きく、「モレ」の 2 大要素として、「人為的なモレ」と「非人為的なモレ」がある。その約 7 割がヒューマンエラーとしての「人為的なモレ」となる。このヒューマンエラーをいかに防いでいくかが、排せつケアの第一歩となるため、紙オムツの選別法、当て方、症状・体型にいかに対応していくか具体的な説明がある。また、睡眠のリズムと尿の生成から考える「夜間安眠のための排せつケア」、「皮膚状況に良いオムツ内環境」等、実際のケアに必要な知識の講義をいただく。

【第二部】「ベッド上でのおむつ交換等の身体介護の実際」講師：福島県介護福祉士会 介護技術指導員 3 名
技術指導者が「ボディメカニクス」を用いた、正しい紙オムツのあて方や現場で活かせる紙オムツ使用の工夫などを参加者一人ひとりに技術指導を行い、参加者全体で、技術の共有がなされた。



泉崎村保健福祉総合センター